

ストラテジック・カルチャー(16.03.23)

オバマのキューバ訪問の意味 宣伝とは反対の歴史歪曲

ネット新聞のストラテジック・カルチャーはオバマ大統領のキューバ訪問が本人の宣伝文句とは裏腹の歴史歪曲に満ちた行脚であるとする記事（3月23日）を掲載した。以下はその要旨。

オバマ大統領は3日間に及ぶキューバ訪問を「両国間の関係構築にとって歴史的な機会」と述べた。

彼はハバナ到着早々、「キューバの人たちと直接会って聞きたい」と発表した。何と尊大なことか。重大で和解的に聞こえるが、悲しいことにそうではない。

米国メディアの誇大広告は米国の対キューバ観が一方的でグロテスクに歪曲されているという事実を捻じ曲げている。事実は、米国が1100万の人口を有する貧乏な島国に対して残忍な禁輸措置を科し続けているということである。これはまさに経済戦争にほかならない。また、勝手な理屈がまかり通ったために多くの人々が思い出せもしない事例になっているのである。

禁輸を正当化する公式の説明は忘れられがちだ。何故なら、本当の理由は「力は正義」の論理があらゆる政治的異論を踏み潰すからである。

米国はまた、グアンタナモ湾にある軍事基地の拷問収容所を維持することでキューバの領土を占領し続けている。

この二つの点でキューバの自主権の根本的侵害が議題になることはない。

米国とキューバの関係は歴史的な意味のある事例に満ちている。

1898年の米西戦争に続くキューバ占領、1959年の革命、ピッグス湾事件（侵略）。そして、その後数十年間にわたる米国による数え切れないほどの戦争行為。カストロ首相に対する数十回の暗殺未遂、キューバ民間機爆破事件（1976年）などといったテロ、破壊行為、穀物や動物に対する大規模の中毒事件など枚挙にいとまがない…。

米国メディアが都合よく省略するもう一つの歴史的関係は、米国の真の支配勢力—軍産複合体、ウォール街の銀行や大企業—がキューバ革命圧殺の妄想に取り憑かれていることである。その流れの中で1963年に暗殺されたケネディもその犠牲者だ。

過去50年、米国の民主主義は消滅した。米国の社会的諸条件は年々悪化し、貧困と不平等が歯止めがきかないレベルに達している。

キューバは米国の民主主義崩壊の隠れた歴史の要である。オバマのキューバ訪問を「歴史的」とする主要メディアからはそれは決して見えてこない。

米国の対キューバ禁輸措置の終了とグアンタナモ基地返還を拒み続けるのは、米国が悔悟しない犯罪的政権であることの重要な指標となる。